

「図工もメディア創造力も、『正解』はない！」。 「連画：絵のリレー」で 子どもたちにつけたい力、 そして「将来への種まき」とは？



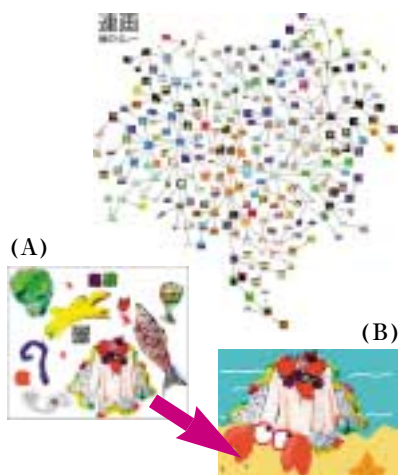
有馬佳子
石川県金沢市立
犀川小学校教諭

「メディア創造力」の育成を主目標に掲げた、新生「D-project（デジタル表現研究会）」の今月は、石川県金沢市立犀川小学校の有馬佳子先生が登場。2年生から6年生までの図画工作を受け持っている有馬先生は、「目先の成果にとらわれることなく、長期的な視野に立って子どもたちの将来につながる力を育みたい」と語ってくれた。

連画

「絵のリレー」を通して育成したい力

「見立てる力」「鑑賞する力」など、「見る目」を磨きたい



▲友だちの描いた絵に、新たな絵をつなげていく「連画：絵のリレー」。絵のつながりは、上のような俯瞰図で表される。(A)は最初の「種絵」で、この絵から生まれたのが作品(B)だ。「どんどん絵をつなげていく楽しさは、子どもたちの創作意欲を喚起します。絵だけでなく、ストーリーも作ってつなげていければおもしろいですね」

「図画工作では、作品主義の傾向が未だに強いんです。『作品が入選した、落選した』と、保護者などが一喜一憂している姿をよく目にします。でも、芸術家を育てるのが図工の目的ではありません。目先の成果や作品の評価にとらわれ過ぎては、本来の目的を見失ってしまうのではないのでしょうか」

有馬先生は、「図工＝自分なりの答えを見つけ出す活動」と定義する。「他の教科と違い、図工に『正解』はありません。自分の力で考え、感じ、表現し、自分なりの答えを探し出していくのです。まさに、D-project 2が掲げる『メディア創造力』そのものなんですよ」

有馬先生は、3年前からD-projectの「学校連画：絵のリレー」に参加している。友だちがパソコンで描いた絵や「種絵」(A)の中から好きな絵を選んで鑑賞し、自分なりにイメージを膨ら

ませて新たな絵(B)を描きつなげていく活動だ。

「丸いケーキの絵を見て、ケーキを背負ったヤドカリの絵を描く子もいれば、丸いロケットの絵を描く子どももいます。連画は、ある物を別の物に『見立てる』トレーニングになるのです。ですから私は、元の絵を少しだけいじるのではなくガラッと変えてみよう！と、指導しています」

連画は、「見立て」や「発想の広がり」といったイメージトレーニングを行うショート教材だと語る、有馬先生。図工の授業で、子どもにどんな力をつけさせたいと考えているのだろうか。「子どもの『見る目』を磨きたいと願っています。作品を鑑賞して良さを理解し、自分なりに感じとったことを表現する力、と言ってもいいでしょう。図工だけでなく、国語での新聞作りやプレゼン発表などでも活きる力です」

指導

具体的な指示は出さず、ヒントを与える

「もっとこだわってみよう」が口癖

「見る目」を磨くために、有馬先生が心がけている指導方針がある。

『もっと上を目指させる』指導を目指しています。『できたよ!』と子ども

が作品を持ってきても、『見づらくない? 気持ちが伝わるかな?』とダメ

出しし、改善を促すのです」

有馬先生の口癖は、「もっとこだわってみようよ」だという。「適切な指導をするには、子どもがどんなイメージを持って、どんな絵を描こうとしているのか、事前に方向性を把握しておかねばなりません。子どもの目指す方向に沿う形で、もう一段上を目指そうよと背中を押すのです。具

体的な指示は出しません。その子に合ったヒントを与えるだけです」

デジタルで表現すれば、何度でも納得のいくまで簡単に修正・改善できる。

「図画工作でデジタル表現を行うことを疑問視する方もいますが、デジタルにはデジタルならではの良さがあります。パソコンも、絵筆と同じ道具のひ

とつだと思います」

子どもによって「背中の押し方」が違うように、評価の基準も違う。「全員ここまででは到達させたいという最低限の目標はありますが、基本的には子ども一人ひとりに合わせて評価基準を設け、できる子はより高いレベルを目指すように指導します」

今後 芸術家とのセッションで、子どもを揺さぶりたい

いつの日か芽吹く種をまくのが、教師の仕事



▲授業の後には必ず、「この授業で何ができるようにになりましたか?」と子どもたちに問いかけ、ワークシートに書かせているという。「この書き出しの中に、芽吹きの予兆が隠れているんです。漠然と絵を描いたりモノを作るだけでは、種まきにならない。教師の腕の見せ所ですね」

「今後は、プロのアーティストと連画をしたいですね。元になる「種絵」が素晴らしいと子どももイメージを広げやすいですし、良い作品を鑑賞することで『見る目』も磨かれます」

実は、プロのアーティストが参加した連画を、有馬先生はすでにD-projectで経験している。その際、貴重なヒントを得たのだという。

「私が良いと思った作品と、アーティ

ストの方が『素晴らしい』とほめてくれた作品とが、違っていたのです。そのときは正直焦りましたが(笑)、この『ズレ』を授業で活用しない手はない。たとえば、教師と芸術家それぞれが高評価した作品を鑑賞して、どっちが良いと思うか子ども同士で討論させてもいいでしょう。その際、必ずしも芸術家に『なぜこの作品が良いか』について理由を語ってもらわなくてもいい。教師と芸術家では評価が違うという事実を目撃することで子どもを揺さぶり、『図工に正解はない。さまざまな視点や価値観があるんだ』と体験の中から学ばせることに意義があるので。人間は、他人と同じ意見だと安心して思考を止めてしまう。いろいろな意見や価値観に触れることが刺激になり、『見る目』の育成につながります」

そのため、有馬先生は「図工室を飛び出そう!」を合い言葉に、学校外の世界と積極的に関わるようにしている。市の美術館に頼み込んで、美術作品を観覧した後、館内で連画のワークシ

ョップを開いたこともあるそうだ。「優れた作品を鑑賞し、多様な価値観に触れる授業や実践を行っても、すぐに成果が出るとは限りません。『見る目』は一朝一夕で身につく力ではないからです。長い目で、子どもを育てていく姿勢が欠かせませんね」

学級担任にはない、専科教師ならではの強みがここにある。

「一人ひとりの成長を、年度を越えてロングスパンで見守れるのが、専科の強み。今の5年生は2年生のときから、4年生は入学時から見ていますから、どんな力がついてきたかがよくわかる。『昔に比べてうまくなったね』とほめて自信をつけさせています」

子どもたちも数年前に自分が描いた作品を振り返って『上手になったなあ』と成長を実感しているそうだ。

「いつの日か芽吹くことを信じて種をまき続けるのが、教師の使命。目先の成果にとらわれず、長い目で子どもを見守り、将来のために種をまいてあげたいと思います」

メディア創造力 育成授業の視点

D-project会長
金沢大学教育実践総合センター
助教授 中川一史

メディア創造力とは、「メディア表現学習を通して、自分なりの発想や創造性、柔軟な思考を働かせながら、自己を見つめ、きり拓いていく力」を意味します。有馬先生が指摘したように、メディア創造力にも図画工作にも「正解」はありません。世の中にはさまざまな価値観があることを体験させ、子どもを揺さぶり、一人ひとりの「答え」へ導く教師の腕が問われます。また、図画工作もメディア創造力も、すぐに成果は現れません。しかし一見無駄に見えても、ボディーブローのようにいつか必ず効いてきます。子どもの将来のために種をまき、芽吹きを見逃さず認める長期的な教育と、子どもの個性に合わせてその都度指導する短期的教育の両方が、必要です。